



豊かな森に囲まれたトレント魔法学校の広い校庭に、黒いローブを着た生徒たちが集まっている。背丈はてんでばらばらで、ノッポばかりの六年生や、その腰辺りにやつと届くくらいの一年生たちが混じり合っていた。

今日は初等部で一年に一回行われる、魔法検定の日だ。魔法の知識を確認する筆記試験はすでに終わり、実技試験に入っている。

がちりとした体格の六年生の後ろで、ファイルは浮かない顔をしていた。さつき行われた発動速度テストでは、一番いい評価のAランクをもらっていたが、これから行われるのは苦手としている魔力テストだ。魔力の強さは空气中に漂う魔素まそをどれだけ体内に取りこめるかで決まるが、ファイルはそれが極端に少なかった。本日より三年生となるにもかかわらず、新入生たちに負けうなほほどだ。

「このテストは俺の勝ちだな」

不安な気持ちでテストの様子をうかがっていると、後ろから整った顔立ちの少年が声をかけてきた。ファイルの陽に輝く金髪とは対照的に、吸いこまれるような黒髪の少年は、同級生のアルだ。

「速度はCだったけど、これで逆転できそうだ」

アルは得意気な表情で言った。テストの合計点を競い、負けた方がゴールドジュースをおごる。この賭けは一年生の時から恒例行事となっていたが、今のファイルにはそんな勝ち負けなど、どうでもよかった。魔力テストでEランク以下になると、一般学校の方へ転入させられてしまうという噂があったからだ。最低限必要な魔力量は年々上がってきている。

「僕、パスできないかも……」

「……うーん、本当にやばそうだったら、俺が後ろから助けてやるよ。ちょっと触るだけだし、ばれないだろ」

アルの言葉にファイルは力なく笑った。担当官の目の前でそんなことをするのは不可能だ。仮にそれで受かったとしても、今後の授業にはついていけないだろう。

前に居た六年生のテストが終わり、ついに順番が回ってきた。ファイルはアルに向かって頷くと、決死の表情で古ぼけた秤の前へと進んだ。

「はい、名前と学年は？」

リットン先生が手用の用紙を見ながら言った。四十歳前後の男の先生で、四年生を受け持っている。

「フィリップ・ローウェル、三年生です」

ファイルはぎゅつと拳を握りしめた。心臓の音が魔太鼓まだいこのように大きく聞こえてくる。

「ああ、フィル君か。じゃ、前から三番目の杖に手を触れて」
フィルは魔力以外の成績が優秀なのと、普段の素行がよかったので、先生たちの間では名前を知られていた。

秤の上に置かれている木の杖へ、そろそろと手を伸ばす。まるで、毒虫に触るかのような恐怖感だった。体内の魔素を測るものなので、力をこめても意味がないことはわかっていたが、フィルは全力で杖を握った。

茶褐色の針はEのラインを超えたり超えなかったりと、危なっかしげにフラフラしている。

「うーん……」

リットン先生は厳しい表情で針を見つめている。お願い、合格にして！ と、フィルは心の中で叫んだ。

「よし、Eランクだね」

リットン先生が微笑むのを見て、フィルは大きく息を吐いた。最低のEランクをおされた成績表を、Aランクをもらった時のように晴れ晴れとした顔で受け取る。

「よかったな、フィル」

アルは嬉しそうに笑いながら、背中を強く叩いてきた。

フィルはにっこりと笑い返し、その場でアルのテストを見守った。いや、見守ると言うより見たかった。自分の情けない魔力とは違う、圧倒的な力を。

「アルバート・デュベリー。三年生だね」

アルが名乗る前に、リットン先生が言った。トレント魔法学校の中で、アルの名前を知らない者は居ない。いつの間にか、周りの生徒たちも集まっていて、ちよつとした輪ができていく。

アルが人差し指で杖に触れた瞬間、針がガツンと勢いよく右に振り切れた。その秤が壊れんばかりの勢いを見て、周りの生徒たちから歓声があがる。魔力に定評のある生徒でも、ゆっくりと針が動き、真ん中辺りを指すのが精一杯だ。針がこんな動き方するのはアルだけだった。

「……さすがだね。文句なしのAランクだ」

リットン先生は満足そうに頷き、アルの成績表にスタンプをおした。

アルは周りで拍手する生徒たちに大仰な身振りで応えると、こちらの成績表を覗きこんできた。

「よし、これで俺が一步リードだな」

「うん。Aランクが五点、Eランクが一点だからね。アルが八点、僕が六点。筆記試験を入れなければ……ね」

「魔法は使うものだ。これ、俺が考えた名言な。でも、去年よりいい勝負になってるじゃん。今年こそはフィルに勝てるかも」

勝敗を決める最後のテストは、魔法精度テストだ。終わり次第、帰ってもいいことになっているので、早く終わらせれば遊ぶ時間が増えることになる。

普段は屋外の授業で使われている大樹の下に、三十人ほどの生徒が二列に並んでいた。比較的空いている右の列に並んだものの、この列だけちつとも動かない。しびれを切らして確認しにいったアルは、苦虫をかみ潰したような表情で帰ってきた。

「まいった、トロ・マだよ……」

「げっ、これは帰れないぞ」

後ろに居た同級生のルイス・マクベインが、大げさな身振りで頭を抱える。

列の間からひよっこりと顔を出すと、でっぷりと太った男の子が杖を握りしめて、うんうんと唸っているのが見えた。間違はなく同級生のトロン・モリスンだ。

トロンは同級生の中でも一番のノロマで、いつの間にかトロマと呼ばれるようになっていた。トロイ魔法使いでトロマ。ほとんどの生徒がそのあだ名で呼んでいるが、フィルは彼の気持ちがよくわかったので、きちんとトロンと呼ぶようにしている。もつとも、能天気な性格のためか、本人はあまり気にしていないようだった。

「もつと集中しなさい。あなたならできるはずです」

マロリー先生がトロンを励ました。三年生の担任でもあるマロリー先生は、トロンと同じような体型をした中年の女性だ。

どうやら、三年生は杖から出した炎の色を変化させるテストのようだ。難易度的にはそれほど難しくないが、使い慣れた自分たちの杖ではなく、テスト用に用意された共通の杖というのが厄介かもしれない。

隣の列では何人もの生徒がテストを終えていく。六年生などは火球を花のような形にして撃ち出すという高度なテストだったが、それでもトロンよりは早い。トロンの魔力はフィルよりもかなり強いが、魔法を発動させるまでにやたらと時間がかかり、コントロールも下手だった。普段の所作に加えて、そういった点もトロマと呼ばれる一因になっているのかもしれない。

トロンが構えた杖先から真っ赤な炎が噴き出したのを見て、フィルは安堵の息を漏らした。一度発動してしまえば、後はそれほど遅くないはずだ。

「できましたね。それでは炎の色を青に変えてみて下さい」

「えっと、青は……」

トロンは首を傾げながら、杖を持つ手に力をこめた。炎が急激に大きくなったが、色は赤のまままだ。

「あれれっ？ えっと……青はこう？」

今度も炎の色は変わらずに、小さくなっただけだった。トロンは顔を真っ赤にしながら必死に頑張っていたが、大きさを変化させることしかできなかった。

「……わかりました。もう結構です」

マロリー先生は眉間にしわを寄せ、厳しい表情で言った。ここからでは見えないが、Eのスタンプをおされたに違いない。

「あれじゃ、魔法を撃つ前にやられちゃうぞ」

頭をかきながら戻ってきたトロンに、アルが軽くチョップを食らわした。

「だって、むずかしいんだもん。たぶん、アル君だってできないよ」

「簡単だよ、あんなの。魔力の量を変化させるだけじゃん」

「いや、それだとトロンがやったみたいに、炎が大きくなるだけだよ」

「え、違うの？ どうやるんだっけ？」

「魔力を火の元素に変換する時に、他の元素を少し加えるんだよ。二年生の時に習わなかったっけ？ 地の元素ならたくさんの色に変化させることができるけど、青だけでいいのなら風の元素が簡単な」

フィルは指先から小さな炎を出し、それを青色に変えた。杖なしで魔法を使えるというのはフィルの特技だ。魔力が少ない代償か、フィルは魔法のコントロールや速度が飛び抜けていた。「なるほど。風の元素ね。悪いな、トロマ」

「ずるいなー、アル君は。僕もフィル君に教えてもらえばよかった」

トロンは残念そうに言うのと、のっしのっしと歩いていった。

しかし、アルも魔法のコントロールは得意な方ではない。体内の魔素が多すぎて、微妙なコントロールができないためだ。最終的には何とか水色っぽくなったが、杖を二本破壊してしまったのと、炎が無駄に大きすぎるということで、Dランクのスタンプをおされてしまった。

「ちくしょー。やっぱ、上手くできないな」

「ふふ、見ててね」

フィルはスタスタと歩いていき、テスト用の杖を取った。魔力テストと違って、これは自信がある。

「フィル君ね。それでは、炎を赤色から青色に変えてみて下さい」

「はい」

大して集中する必要はなかった。あつという間に杖先から小さな炎が噴き出し、たちまち美しい青色へと変わる。特に指示もなかったが、フィルは炎を花びらのような形状にした上で、それぞれを七色に変化させた。マロリー先生が思わず拍手する。

「素晴らしい！ 文句のつけようがありません！」

Aのスタンプをおしてもらい、意気揚々とアルの所へ戻る。アルは悔しそうな顔で、成績表を見比べた。

「俺がC、A、D、フィルがA、E、A。あーあ、今年も俺の負けか……。魔法の速度は一つ上がったんだけどなあ」

「うん。来年は負けるかも。それじゃ、ゴールドジュースお願いね」

「わかったよ。じゃ、これ提出して帰ろうぜ。そうだ、今日は時間もあるし、町に寄って行かないか？」

トレント魔法学校から北へ行くと、イペという大きな町がある。行商人も立ち寄るため、ここサウスティア大陸以外から仕入れられた珍しい品を見ることができた。

「うーん、お小遣い持ってきてないんだよね。今日はシャンペーンの滝で遊ばない？」

「お、いいねえ。負けた悔しさを滝にぶつけるか」

アルはポキポキと指を鳴らした。

「それじゃ、アルは杖を取ってこないと」

材質にもよるが、魔力が強いほど大きな杖が必要になる。フィルの杖は小枝よりも小さく、腰からぶら下げている皮袋にすっぽりと入っているが、アルの杖は自身の背丈ほどもあった。

「重いから嫌なんだよな。でも、滝で遊ぶなら杖が要るか」

「うん。それに置いていったのが先生に見つかったら、また居残りさせられちゃうしね。僕が成績表を出しておくから取ってきて」

「んじゃ、これ頼む。他に何人か誘っついて」

アルは生徒たちの間を縫うように駆けながら、古びた校舎へと入っていった。

フィルは成績表を回収箱に入れ、校門近くの木にもたれかかった。魔法検定を終えた生徒たちが、笑い合いながら目の前を通り過ぎていく。試験が終わった解放感からか、誰もがウキウキとしているように見える。心配の種だった魔力テストを無事にクリアしたフィルもまた、頬が緩むのを抑えられなかった。

肩の荷が下りたという感じで声をかけてきたルイスと、物欲しそうな目でこちらを見ていたト

ロンを誘い、一列に並んで冗談を言い合ったりしながら、滝へと続く森の小道を歩いていく。
空は青く澄んでいた。